

木又上人の導き

その二

「田中木又先生寸言聞書抄」二

菅野真定編

『九光』昭和二十九年七月号

○身は常にお相撲さんのマワシをしめた心持。靈応を宿しまつる心殿。肉欲、我欲に使わるるな。お役に立つ道具。

○不都合なれど、もっともなところがどこかにある。相手の頭になって、相手の立場になって。

○酔ってる者は酔ったとはいわない。伝教大師はご自分を狂酔の凡夫と仰せられた。

○金は中味をしぼったカス、仕事の中味ですよ。

○金儲けの為に非ず、仕え奉るなり。

○金がふえれば欲もふえ、驚があれば籠が欲しくなる。着物ができれば帯が欲しい。

○物があつて心貧乏。

○あればあり、なくばなきまま、また楽し。

○若い嫁に栄養と休養を与えよ。母は日本の母、日本を産む母。

○ 畑打ち 拝んで帰る 夕陽かな

念仏は田の畔が結構、畑仕事の行き帰りはなおさらありがたし。

○ いつもイキイキ、いつもイソイソ、いつもビノビ、いつもハレバレ、いつもキビキ、いつもニコニコ。

○ お薬もご飯も南無阿弥陀仏でいただけ、「信念によって消化し」と、食作法で読むではないか。

○ お寺さんの回向は郵便切手、中に書く皆さんの文句「念い、念仏」が大切、白紙の郵便では意味がない。

○ 英霊に対する回向が二十五年後の日本の栄えを決定する。

○ 過去に後悔、現在に不安、未来の気がかりを悩みという。

○ インド仏教は三昧、支那仏教は哲学、日本仏教は生活と、おのの特色があり、重点がある。

○ 唯の三昧主義が光明主義にあらず、三昧に入り生活にでる。別時が別時で終わっ

たら外道。

○ 人生に直線道なし。右左登り下りと程がよく、くねって行くが人の行く道、世の中は二人三脚、ゆずり合い。

○ 白露を こぼさぬ萩の うねりかな
○ 名号は光明なり、靈電なり、スイッチをひねる「の」が称名。

○ 苦しみは 人格磨く ツヤブキン

○ 念仏の欲が出れば、世間の欲はなくなる。

○ 三昧中にいかなる靈感があつても、それが最後にあらず。

○ 南無阿弥陀仏の人生はサラサラサッパリ。

○ 三昧は不成就でも、慈悲の願船に乗り込んでいることは決定、必定、間違いない。

○ 乱るる時、ドウシテと我を責める、これが心の盲点、どうぞと下ささい。

○ 自己に正しく、人にやさしく。

○ 初一念を貫くが研精不倦。効果がなかった時が大切。やめたらそれ切り。

○ 可愛がった子が却て成長すると親不幸。

○ (懺悔)の雨の日、(感謝)の照るわが心。



田中木又上人

- 心に太陽を持て。
- 水急なるも月を漏らさず。
- 松かげの 黒きも月の 光かな
- やさしい地蔵様のおじひ、こわい不動様のおじひ。

「田中木又先生寸言抄」一 菅野真定編

『めぐみ』昭和三十年六月号

- 別時は休憩中が大切、独りが結構。
- 説法は聞きつつ聞かずで充分。
- 死んで生まれる。この答案は0点の0点。
- 霊性が育つのは地面の中で種が育ち、胎内で子供が育つようなもの。
- 説法は解らんがよし。宿題となるものがあつてなおさら結構。

- 唯の天地で「は」ない。闇あんの圧力というか、何かましますの实感が大切。
- 休憩中でも心「と」舌「が」動かざれば別時は怠おろそかと思へ。
- 聞いた話ではだめ。確信を得よ。
- 如来を疑つても、光明は疑うな。
- 三昧の状態も結構なれど、三昧を心がける努力が尊い。

- 念仏すると、学校教育、家庭教育、社会教育で生まれぬ新しい芽がでる。
- 下地は強く縁はよし。用心をしていてもすべるのが凍った雪の道。
- 欲を抑えて、義理、人情をつくす。
- あの人のあの事を許しなさい。無いとは言わせぬ。
- 空論ではいかぬ。實際論でなければ。
- 一つの屋根の下で暮らす問柄の方に問題がある。
- 一口でおけば承知のいくものを、一口添

「縁者への御軸」一



- えて反対をさす。
- 一口「を」もって人を活かし、一口「を」もって人を殺す。
- 急所をつくな。
- 消えた提灯を差し出すチョンマゲ思想。
- 一つでも年上の人には、はい、そうですね。という癖を作れ。
- 刀のさやが正宗にあらず。鉛筆の木が鉛筆にあらず。死ぬる体が我にあらず。
- 体で働くから疲れる。花に舞う蝶のごとく、ヒラヒラ、イソイソと働け。
- 念仏は身、心、魂のドブさらえ。
- 聖意みねよ我に現れよ、靈国みくによここに格きたれかしが南無。
- 金で買えるものは物、幸福は断じて買えない。
- 心貧乏が一番貧乏。
- 金持ちは心も豊かになれ。
- 口に出せば苦しみが救われる。